

## 痰の起源 (一)

— 漢訳仏典にみられる痰の検討 —

遠藤次郎、中村輝子、八巻英彦、宮本浩和

中国伝統医学では、痰は喀痰よりも幅広い意味を持ち、粘性を有する非生理的体液全般をさす。痰は重要な病理的概念であるために、中国伝統医学で古くから認識されていたと思いがちであるが、『素問』、『靈樞』、『難経』などの古典の中には、この用例がない。この不思議な事実について、中国でも日本でも一部で古くから注目されてきた。しかしながら、どの論説も問題を提起するにとどまり、解決するまでには至っていない。

著者らは中国伝統医学と仏教医学との関係を研究する過程で、仏教医学の導入と並行して「痰」の文字が中国で使われたしていることなどから、痰は仏教医学の影響により作られた概念であるという見方をもつに至つた。

本報では漢訳仏典中の痰の用例を時代を追って検討した。痰の概念を追跡することにより、質的に異つたインドの伝統医学を中国がいかに受容していったかを明らかにしていきたい。なお、中国の医書における「痰」の受容と変遷については別稿で論じたい。

## 一 仏教医学における痰の重要性

仏教医学は四大不調説を根幹としており、仏教医学と密接な関係にあるインド伝統医学（アユルヴェーダ医学）はトリドーシャ（三つの病素の意味）学説を根幹としている。したがって中国が仏教医学を導入するには、まず、四大不調あるいは三つのドーシャの解釈に迫られる。痰は、四大不調あるいは三つのドーシャのうちの一つであるので、この概念を無視して仏教医学を受容することはできない。先にも述べたごとく、『素問』、『靈樞』等の中国の伝統的な医学のなかには痰の概念がない。したがって、痰を訳すに際しては既存の類似した概念で代用するか、あるいは新しい訳語を作る必要があったとみられる。

## 二 カパの翻訳

トリドーシャ（ヴァータ、ピッタ、カパ）のうち、カパは今日では痰と訳されるが、漢訳仏典では初めから痰と訳されていたわけではない。訳者および時代により、大きく変遷している。代表的な仏典中のトリドーシャまたは四大不調を整理すると表一のようである。<sup>(五)</sup>このうち、カパに注目すると、大雑把ではあるが、訳は次のように変遷していることがわかる。

(一) 仏典の翻訳が始まったとされる後漢から西晋までは「寒」と訳している。

(二) 東晋から元魏までは「冷」または「水」と訳している。

(三) 梁、陳以後は「痰」または「痰癰」と訳している。

カパを「痰」と訳したのは、中国で最も仏教が栄えた唐代に近くなってからである。仏典の内容を十分に咀嚼した結果、カパに対して痰という当を得た翻訳ができたとみることができよう。一方、梁、陳以前の「寒」、「冷」、「水」とい

表1 漢訳仏典における四大不調説およびトリドーシャ学説の変遷

時代	仏典	風(ヴァータ)	火(ピッタ)	水(カパ)	地
後漢	七処三観経(安世高) <sup>(1)</sup>	風	熱	寒	
	阿閼佉国経上(支婁迦讖147年) <sup>(2)</sup>	風	熱	寒	
呉	佛医経(竺律炎共支越) <sup>(3)</sup>	氣	熱	寒	力盛
西晋	修行道地経1(竺法護284年) <sup>(4)</sup>	風	熱	寒	共合 食 三合之病
	胞胎経(竺法護303年) <sup>(5)</sup>	風	熱	寒	
	賢劫経1(竺法護) <sup>(6)</sup>	風	熱	寒	
東晋	増一阿含経12(瞿曇僧伽提婆397年) <sup>(7)</sup>	風	痰	冷	雑病
	摩訶僧祇律10(仏陀跋陀羅共法頭416年) <sup>(8)</sup>	風	熱	水	
後秦	十誦律8(弗若多羅404年) <sup>(9)</sup>	風	熱	冷	
	大智度論1(鳩摩羅什405年) <sup>(10)</sup>	風	熱	冷	
	思惟畧要法(鳩摩羅什) <sup>(11)</sup>	風	熱	寒	
北凉	金光明経3(曇無讖) <sup>(12)</sup>	風	熱	肺	等分病
	大般涅槃経25(曇無讖421年) <sup>(13)</sup>	風	熱	水	
	同39 <sup>(14)</sup>	風	熱	冷	
	大方等大集経24(曇無讖) <sup>(15)</sup>	風	黄水	白水	
元魏	正法念処経64(瞿曇般若流支) <sup>(16)</sup>	風	熱	冷	
陳	四諦論1(真諦) <sup>(17)</sup>	風	膽	痰	等分病
唐	俱舍論10(玄奘651年) <sup>(18)</sup>	風	熱	淡	雑病
	大毘婆沙論70(玄奘656年) <sup>(19)</sup>	風	熱	痰	
	大般若波羅蜜多経331(玄奘663年) <sup>(20)</sup>	風	熱	痰	
	顯宗論1(玄奘) <sup>(21)</sup>	風	熱	淡	窶嚙 沈重
	南海帰寄内法伝下(義浄) <sup>(22)</sup>	婆哆	畢哆	變跛	
	// <sup>(22)</sup>	氣発	熱黄	痰癰	
	// <sup>(22)</sup>	風	熱	癰	総集病 総集病
	根本薩婆多部律攝8(義浄700年) <sup>(23)</sup>	風	熱	痰癰	
	金光明最勝王経9(義浄703年) <sup>(24)</sup>	風	黄熱	痰癰	
	根本説一切有部毘奈耶雜事12(義浄710年) <sup>(25)</sup>	風	黄	痰癰	
	大宝積経19(菩提流支713年) <sup>(26)</sup>	風	黄	痰	
	仏母大孔雀明王経上(不空) <sup>(27)</sup>	風	黄	痰癰	
	心地観経6(般若) <sup>(28)</sup>	風	黄	痰癰	
四十華嚴経11(般若798年) <sup>(29)</sup>	風	黄熱	痰癰	総集病	
俱舍論記10(普光) <sup>(30)</sup>	風	熱	痰		

\*注の番号の後には、『大正新脩大蔵経』の巻数、ページ数、上中下段を記した。(1)2巻,882ページ,上段;(2)11,755,下;(3)17,737,上;(4)15,188,下;(5)11,890,上;(6)14,8,中;(7)2,604,中;(8)22,316,下;(9)23,61,上;(10)25,60,上;(11)15,297,下;(12)16,352,上;(13)12,511,中;(14)12,593,下;(15)13,169,中;(16)17,379,上;(17)32,382,下;(18)29,56,中;(19)27,363,中;(20)6,695,下;(21)29,777,上;(22)54,224,上;(23)24,571,下;(24)16,447,下;(25)24,257,中;(26)11,105,中;(27)19,416,中(28)3,321,中;(29)10,711,中;(30)41,184,下。

った用語による翻訳については、次のような見方ができる。四大不調説とは「水大に異和が起されば百一の痰病が起る。火大に異和が起されば百一の熱病が起る。風大に異和が起されば百一の風病が起る。地大の異和が起されば百一の総集病が起る。」といった内容である。水大の属性に注目すると痰は「寒」、「冷」、「水」と翻訳され、病原の実体に注目すると「痰」の文字が必要になる。

中国の伝統的な陰陽五行説は「実体」を持たない「属性」の理論であるといわれる。したがって、痰などの非生理的物質を基礎に置くトリドーシャ学説「ヴァータ(下風)、ピッタ(胆汁)、カパ(痰)」は中国にとつては異質なものであつたはずである。このため、カパを痰と翻訳するまでに時間がかかったのであろう。

「痰」に至るまでの属性に基づく訳語、「寒」、「冷」、「水」の中にも段階的な発達が窺える。すなわち、初めの「寒」という訳語に比べると「冷」や「水」という訳語のほうが体液という実体に近い。「寒」から「冷」、「水」を経て、非生理的体液としての実体を持った「痰」という訳語に至つたとみることができる。なお、唐以後の仏典においてカパの訳語とされた「癰」も痰と同様に一つの実体を持った病原である。これについては別報で考察したい。

### 三 喀痰を意味する痰の翻訳

トリドーシャのカパを訳す際には四大(地、水、火、風)の属性にのつとつた翻訳も可能であるが、排泄物としての喀痰を訳すとなると、実体として表現せざるを得ない。このことから、喀痰をどのように訳しているかを漢訳仏典にあたってみた。

漢訳仏典では、皮肉筋骨や内臓器官はもとより、分泌物や排泄物まで含めて、身体は三二または三六物からできあがつているとして<sup>(八)</sup>いる。さらに、仏典によつてはこれらを属性の違いに基づいて地大と水大に分類する例もみられる。地大に属するものを内地大(内は体内の意味)、水大に属するものを内水大と呼んでいる。その属性からみると喀痰は内水大

に属する。内水大に属する喀痰およびこれに関連した分泌物や臓器だけを仏典から抜き出し、比較対照したものを表二(九)に示す。

まず、隋唐以前の仏典では喀痰に相当する訳語が記されていないことが多い。これは、中国の古い時代には喀痰を唾(二)や涎のなかに含めていたため、喀痰を内水大の中の唾に含めて表現したからである。パーリ語で書かれ、近年になって日本語に訳された南伝仏教の經典では喀痰と唾とを区別して書いて(八)いる。したがって、北伝の漢訳仏典でも唾と喀痰とを区別して記していたと考えられる。翻訳の初期段階では唾の中に喀痰を含めていたが、東晋時代になると原本にのつとって喀痰を独立させようとする動きが起きたことが表二からわかる。

痰の概念が確立するに至る過程をみると決して単純な道筋ではない。詳細に調べてみると、トリドーシャの一要素であるピッタ(膽汁)の訳語がこの過程に深く関わっていたことがわかる。東晋時代の『中阿含經』卷四では内水大の一つに「淡」をあげている。これは一見すると喀痰を意味するようであるが、同書卷三では内水大の「淡」に相当する言葉として「膽」を記している。したがって、「淡」は膽汁を意味すると考えるべきである。このことは、同じ東晋時代の翻訳になる『增一阿含經』でピッタ(膽汁の障害)を「痰」と訳していることから裏付けられる。

膽汁を「淡」や「痰」と表記する理由について考えてみたい。『靈樞』四時気などで膽汁を単に膽と表記することもあ(一〇)るが、体液を意味するのに膽(胆)の字は誤解を招きやすい。そこで、後に、膽から出る体液の意味の「澹」の字が用いられるようになったと推定される。『大毘婆沙論』に「澹熱」の用例があることも、以上の推定を裏付ける。一方、中国では古くから澹の字は淡の字に通用してきた。その際、多くは「淡」の字が用いられる(三)。「淡」は、さらに、病的な「淡」の意味の「痰」の字に容易に変化する。以上のことから、膽汁を「淡」や「痰」の字で表現する由来がわかる。

一方、「淡」や「痰」に対して膽汁と喀痰の両方の意味を持たせている例が見られる。たとえば、『達摩多羅禪經』、『正法念処經』、『釈禅次第法門』などでは膽汁を「黄痰」、喀痰を「白痰」と表現している。

表2 漢訳仏典における32または36物中の「膽囊」「膽汁」「喀痰」「唾」の訳の変遷

時代	仏典	膽囊	膽汁	喀痰および膽汁	唾
後漢	七処三觀經(安世高) <sup>(1)</sup>		膽		唾
西晋	修行道地經4(竺法護284年) <sup>(2)</sup>		膽(水)		唾(水)
東晋	中阿含經7(瞿曇僧伽提婆) <sup>(3)</sup>		膽(水)		唾(水)
	同24 <sup>(4)</sup>		膽		唾
	同42 <sup>(5)</sup>			淡(水)	唾(水)
	增一阿含經2(瞿曇僧伽提婆397年) <sup>(6)</sup>	膽			唾
同20 <sup>(7)</sup>	膽(地)			唾(水)	
達摩多羅禪經下(仏陀跋陀羅) <sup>(8)</sup>			黃白痰癢	唾	
後秦	坐禪三昧經上(鳩摩羅什402年) <sup>(9)</sup>		膽水		唾
北涼	大般涅槃經12(曇無讖421年) <sup>(10)</sup>	膽			唾
劉宋	十二頭陀經(求那跋陀羅) <sup>(11)</sup>	膽		痰癢	唾
元魏	正法念処經64(瞿曇般若流支) <sup>(12)</sup>	膽		黃白痰癢	唾
梁	解脫道論7(僧伽提婆) <sup>(13)</sup>	膽		淡	唾
	同8 <sup>(14)</sup>		膽(水)		唾(水)
北齊	大宝積經73(那連提耶舍) <sup>(15)</sup>		膽(水)		唾(水)
隋	釈禪次第法門8(智顛) <sup>(16)</sup>	膽		黃痰白痰癢	唾
	大宝積經109(闍那崛多) <sup>(17)</sup>	膽		痰陰	唾
	同110 <sup>(18)</sup>	膽		黃淡	唾
唐	大毘婆沙論40(玄奘656年) <sup>(19)</sup>	膽		澹熱	唾
	同75 <sup>(20)</sup>		膽(水)	痰癢(水)	唾(水)
	大般若波羅蜜多經53(玄奘663年) <sup>(21)</sup>	膽		淡	唾
	同414 <sup>(22)</sup>	膽		淡	唾
	瑜伽師地論27(玄奘) <sup>(23)</sup>	膽(地)		熱痰(水)	唾(水)
	根本説一切有部毘奈耶雜事12(義浄710年) <sup>(24)</sup>	膽		黃水痰癢	唾
金毘羅童子威徳經(不空) <sup>(25)</sup>	膽		痰	唾	

\* 36または32物を地と水とに区分して記述している場合は、内地大を(地)、内水大を(水)と記した。なお、この区分を記していない場合は、記述の仕方でも実体を推定し、膽囊と膽汁とを判別した。

\*\* 注の番号の後には、『大正新脩大藏經』の巻数、ページ数、上中下段を記した。(1)2巻、878頁;下(2)15、206、下;(3)1、465、上;(4)1、583、中;(5)1、690、下;(6)2、556、下;(7)2、652、上;(8)15、325、中;(9)15、271、下;(10)12、433、下;(11)17、721、下;(12)17、379、上;(13)32、432、下;(14)32、438、下;(15)11、415、中;(16)46、530、上;(17)11、612、下;(18)11、613、中;(19)27、208、上;(20)27、388、上;(21)5、298、中;(22)7、78、中;(23)30、430、上;(24)24、258、上;(25)21、369、下。

咯痰と膽汁が質的に大きく異なるにもかかわらず、「淡」や「痰」という共通の言葉を使うことの必然性について考えてみたい。インド医学はもとより、ギリシャ医学でも膽汁は吐いた時の液で認識されている。ことにギリシャ医学では、粘液、黄膽汁、黒膽汁、血液などの咯出液により病の種類と程度を診断している。<sup>(一)</sup> 咯出する液体という意味では咯痰と膽汁は同じ範疇に属する。このことから、両者が共通の文字を用い、相互に交流すると考えられる。

表二からわかるように、歴史的にみると、初めに、膽汁の意味の「淡」(澹)や「痰」の字が使われている。次に、「澹」には「水揺らぐなり」の字義があるところから、これに通用する「淡」の字を咯痰(胸間の水気)<sup>(二)</sup>の意味で用いるようになった。さらにその後、膽汁と咯痰の二つの意味を持つ「淡」を区別するために、咯出物のうち、白色で冷性の液を「白痰」、黄色で熱性の液を「黄痰」と表現するようになったとみられる。唐代以降になると、「痰」はもっぱら咯痰を意味するようになるが、唐代になってからも「熱痰」(瑜伽師地論)などの例がみられることからわかるように、「痰」は潜在的に膽汁も含んでいる。すなわち、「痰」は咯痰も膽汁も含んだ広義の咯出物の意義を持つていとみることもできる。

### 三 カパとピッタの翻訳の再検討

ここで再び表一のトリドーシャの訳し方を再検討してみたい。

表二で検討したように、東晋時代からはじまった唾から咯痰を独立させようとする動きは隋代までにほぼ確立したとみてよい。唐代になって、それまで「寒」、「冷」、「水」などと訳されてきたカパが「痰」として確定的に翻訳されるようになった背景には、咯痰が唾から独立し、これが広く認められるようになった状況がある。

次に、ピッタの訳語について述べたい。表一からもわかるように、中国では殆どの場合、「熱」、「黄」、「黄熱」といった属性に基づく訳語を用いている。ただし、初期の翻訳で用いられた「熱」に比べれば、後に用いられた「黄」のほう

が実体やや近い訳語である。ピツタは本来は病素としての膽汁を意味しているが、「膽」(『四諦論』)と訳した例は長い中国の歴史の中でも殆どみられない。痰の字が確立した梁、陳以降でも、「熱」や「黄」といった属性を意味する訳語を使っていた。その一つの理由には、ピツタの属性(火)がカパの属性である水に比べて実体として把握しにくい点がある。また、さらに見逃してはならないのは、ピツタの本来の訳語である膽汁が水大の痰の中に含まれて議論されている点である。このような中でトリドーシャのピツタを翻訳したため、体液の意味合いを持つ用語が採用されなかつたとみられる。

以上を概観すると、中国におけるトリドーシャの受容は全般的には属性による理解であったといえよう。しかしながら、その後、徐々にではあるが病の実体としての理解もなされるようになった。その一つの成果が「痰」という訳語の出現とみることができよう。

## 総括

中国伝統医学で用いられている「痰」の由来を明らかにするために、漢訳仏典にみられる痰の用例を検討し、以下の結果を得た。

一 中国の伝統的な医学では「痰」は唾や涎の中に含まれており、『素問』、『靈樞』、『難経』の中には「痰」の用例がみられない。

二 痰という概念はインド伝統医学の基本的な病理観(トリドーシャ学説)に含まれているので、中国が仏教医学を導入した際に、痰を無視して受容することはできなかった。

三 病原としての痰(カパ)は、元魏以前は「寒」、「冷」、「水」と翻訳され、梁、陳以後は「淡」、「痰」、「痰癰」と訳されている。元魏以前の訳はカパの属する水大の属性に基づいており、梁、陳以後の訳は喀痰の実体に基づいている。

四 喀痰を唾から独立させて翻訳する動きはすでに東晋時代にみられ、隋唐の時代には確立している。

五 「淡」、「痰」は、初期の漢訳仏典では膽汁を意味した。これは、膽汁を意味する「澹」の字が起源であり、「澹」と「淡」が通用し合うことによる。

六 喀痰を意味する「痰」は「澹」の「水揺ぐなり」の意味の転用である。

七 膽汁も喀痰も喀出物という点で共通する概念であり、「痰」は両方の意味を持つ。

八 中国の伝統医学の根幹である陰陽五行説は属性の哲学である。これに対して、インドのトリドーシャ学説は病素としての実体をもった学説である。中国ではトリドーシャ学説を、まず、地水火風の属性の面から把握した。その後、時代が下るにしたがって実体として把握するようになった。トリドーシャの翻訳にみられるこのような変遷の中に、中国におけるインド伝統医学の受容の経過を窺うことができる。

## 謝辞

『金七十論』などの各種の文献をご教示頂くとともに有益なご助言を賜りました鶴見大学女子短期大学部教授、中田直道先生、ならびに文献の閲覧をご許可下さった麗澤大学図書館の方々に御礼申し上げます。

## 文献および注

- 本報での仏典の引用は、高楠順次郎・渡辺海旭編『大正新脩大藏経』（全八五巻）、大正新脩大藏経刊行会、東京、昭和三十年〜昭和五十三年、再刊、によった。仏典名の後に付した括弧内の数字は、『大藏経』の巻数・ページ数・上中下段を示す。
- (一) 張介賓『景岳全書』五三〇頁、上海科学技术出版社、上海、一九八四。原南陽『叢桂亭医事小言』、大塚敬節・矢数道明編『近世漢方医学書集成』（一八）四四三〜四四五頁、名著出版、東京、昭和五十四年。
- (二) 香川修庵『一本堂行余医言』、大塚敬節・矢数道明編『近世漢方医学書集成』（六六）四〇一〜四一五頁、名著出版、東京、

昭和五十七年。

(三) 喜多村直寛『金匱要略疏義』、大塚敬節・矢数道明編『近世漢方医学書集成』(九一)三三〜四〇頁、名著出版、東京、昭和五十七年。

(四) 多紀元簡『医賸』、大塚敬節・矢数道明編『近世漢方医学書集成』(二〇八)七八〜七九頁、名著出版、東京、昭和五十八年、では「百病は痰より生じる」という見方は仏典に由来するという見解を示しているが、痰の概念そのものが仏教医学に由来するという見解にまでは至っていない。

(五) 仏典の訳年は、水野弘元等編『仏典解題事典』春秋社、東京、一九八〇、および、総合仏教大辞典編集委員会編集『総合仏教大辞典』(上・下巻)、法蔵館、京都、一九八七、によった。以下の文献は、紙面の都合上、表一に載せられなかったものである。風・熱・寒、支婁迦讖『道行般若経二』(八・四三六・上)、支謙『大明度経二』(八・四八五・中)、竺法護『修行道地経一・四』(二五・八七・中、一五・二〇八・中、一五、二二〇・下)、竺法護『賢却経一』(一四・九・上)、摩訶般若鈔経二(八・五一七・下)、鳩摩羅什『大智度論八』(二五・二二〇・上)。風・熱・寒、衆病、竺法護『修行道地経四』(六〇六・二〇九・中)。風・寒・熱・癖・竺法護『正法華経三』(九・八五・中)、風・熱・冷、弗若多羅『十誦律一三・二六』(二三・九三・下、一三・九七・上、二三・一八五・下)、鳩摩羅什『小品般若波羅蜜経二』(八・五四五・中)、鳩摩羅什『大智度論八』(二五・一一九・下)、曇無讖『大般涅槃経二』(二・三七八・上)、瞿曇般若流支『正法念処経四八・六七』(一七・二八六・上中下、一七・三九九・中)。風・熱・冷・雜、鳩摩羅什『大智度論五九』(二五・四七七・上、二五・四七八・中)。風・熱・冷・勞、弗若多羅『十誦律五一』(二三・三七七・中)。風・熱・水、仏陀跋陀羅共法頭『摩訶僧祇律四〇』(二・五四四・上中)、曇無讖『金光明経三』(一六・三五二・下)。風・熱・水・雜病、曇無讖『大般涅槃経一』(二・四三五・上)。風・黄・水、曇無讖『大般涅槃経三九』(二・五九二・上)。風・熱・肺(・等分病)、曇無讖『金光明経三』(二六・三五二・下、一六・三五二・上)。風・熱・痰、眞諦『金七十論上』(五四・一二四五・上)。風・熱・淡・雜病、玄奘『大般若波羅蜜多経五一七』(七・六四四・上)。風・熱・痰・和合、玄奘『大般若波羅蜜多経五四一、五五八』(七・七八二上、七・七八八・上)。風・熱・淡・合集、玄奘『大般若波羅蜜多経四三〇』(七・一六三・中)。風・熱・痰・雜病、玄奘『大般若波羅蜜多経四五一』(七・二七七・下)。風・

熱・痰癥、仏陀耶舎共竺(仏念等)「四分律三五」(二二・八一四・中)、義浄「根本説一切有部毘奈耶八」(二三・六六四・下)。風・熱・痰癥・総集病、義浄「金光明最勝王経九」(二六・四四七・下、一六・四四八・上)、義浄「大孔雀呪王経上・中・下」(二九・四六〇・上、一九・四六八・上、一九・四七一・中、一九・四七五・中)。風・熱・痰癥・三集病、義浄「大孔雀呪王経上」(二九・四六一・下)。風・熱・癥、義浄「金光明最勝王経九」(二六・四四八・中)。風・熱・癥・三合、義浄「療痔病経」(二八・中)。風・熱・癥・総集、義浄「金光明最勝王経九」(二六・四四八・中)。風・熱・癥・三合、義浄「療痔病経」(二八・中)。風・熱・癥・癥・癥、義浄「根本薩婆多部律撰八」(二四・五七一・下)。風・黄熱・痰癥・三俱起、義浄「金光明最勝王経九」(二六・四四八・上)。風・黄熱・痰癥・癥、義浄「根本説一切有部毘奈耶雜事二」(二四・二五七・一・四九〇・下)。風・黄熱・痰癥、義浄「根本薩婆多部律撰八」(二四・五七一・下)。風・黄熱・痰癥・三俱起、義浄「金光明最勝王経九」(二六・四四八・上)。風・黄熱・癥、義浄「根本説一切有部毘奈耶雜事二」(二四・二五七・中)。風・黄・痰、闍那崛多「大宝積経一〇」(二一・六一七・上、実叉難陀「八十華嚴経六六」(二〇・三五四・中)、般若「四十華嚴経一一」(二〇・七二〇・下、一〇・七二一・上)。風・黄・痰・三集病、不空「能浄一切眼疾病陀羅尼経」(二一・四九〇・中)。風・黄・痰・和合諸病、菩提流志「大宝積経一九」(一一・一〇四・中)。風・心黄・痰・和合共起、菩提流志「大宝積経五五」(一一・三二五・下)。風・黄・痰癥、義浄「根本説一切有部毘奈耶雜事一」(二四・二五三・中)、義浄「大宝積経五六」(一一・三二八・中)、不空「除一切疾病陀羅尼経」(二一・四八九・下)。風・黄・痰癥・総集病、義浄「大宝積経五七」(一一・三三二・上)、不空「仏母大孔雀明王経中」(一九・四三一・下)。風・黄・痰癥・三集病、不空「仏母大孔雀明王経上・中・下」(一九・四一九・中、一九・四二八・上、一九・四三八・中)。風・黄・痰癥・三集、義浄「観自在菩薩如意心陀羅尼呪経」(二〇・一九七・上)。風・黄・痰癥・等病、実叉難陀「観世音菩薩如意輪陀羅尼神呪経」(二〇・一九八・上)。風・黄・癥・等分、闍那崛多共笈多「添品妙法蓮華経三」(九・一五三・中)。風・黄・癥・等、闍那崛多共笈多「添品妙法蓮華経三」(九・一五三・中)。風・癩・痰癥、日称等「福蓋正行所集経四」(三二・七二五・下)。施護「仏説仏母出生三法藏般若波羅蜜多経四」(八・六〇二・上)。風・黄白痰・涕唾、闍那崛多「大宝積経一一〇」(二一・六二二・下)。冷・熱、鳩摩羅什「大智度論五八」(二五・四六九・下)。掘強・蒸熱・臃腫・沈重、失訳「五王経」(二四・七九六・中)。

(六) 「痰」の訳語が初めて見られる『四諦論』、『金七十論』などは真諦(四九九〜五六九年)が中国に入国(五四六年)してから没するまでの梁、陳の間に著したとみられる。

(七) 荒木正胤「陰陽五行説について」、荒木ひろし編『日本漢方の特質と源流(下)』四五二頁、荒木正胤遺徳会、茨城、昭和五十八年。

(八) 福永勝美『仏教医学事典』一一〇頁、雄山閣出版、東京、昭和五十五年。

(九) 仏典の訳年は(五)と同じ文献によった。また、以下の文献は表二には載せられなかったものである。膽・痰癰・唾、失眠「禪要経」(一五・二三八・上)。膽・唾、瞿曇僧伽提婆「中阿含経二〇」(一・五五六・上)。黄白及痰癰・唾、仏陀跋陀羅「達摩多羅禅経下」(二五・三二八・中)。痰癰、求那跋陀羅「雜阿含経四三」(二・三二一・下)。痰・唾、仏陀多羅「円覚経」(二七・九一四・中)。

(一〇) 「嘔膽」と記している(『靈枢』五一頁、人民衛生出版社、北京、一九八二)。「千金方」では「劇者須吐膽乃上」(宋版『備急千金要方』、『東洋医学善本叢書』(二〇)六六二頁、オリエント出版社、大阪、一九八九)とあるのに対して、『外台秘要』では同じ箇所が「劇者須吐膽汁乃上」(宋版『外台秘要方』、小曾戸洋監修『東洋医学善本叢書』(四)一五八頁、東洋医学研究会、大阪、一九八一)となっている。「膽」が「膽汁」を意味する一例である。

(一一) 表二においても膽囊と膽汁を正確に区別するのは難しい。「膽」の中に両義を持つ可能性が高い。

(一二) 「人間の自然性について」、大槻真一郎等編訳『ヒポクラテス全集』(二)九六〇〜九六三頁、エンタプライズ株式会社、東京、一九八五。

(一三) 慧琳選「一切経音義二三」(五四・四五二・中)。

(遠藤、中村、宮本・東京理科大学薬学部)

(八巻・香栄興業株式会社)

## History of the Term “*Tan*” 痰 (Phlegm) ( I )

—Studies of the Term “*Tan*” 痰 Described in Classical Chinese  
Translations of Buddhist Literature —

by Jiro ENDO, Teruko NAKAMURA, Hidehiko YAMAKI and Hirokazu MIYAMOTO

We traced the origin of the term “*tan*” 痰 (phlegm) in Chinese traditional medicine. This term itself is not found in early works but is represented by the terms of *tuō* 唾 (saliva) and *xian* 涎 (drivel). However, in the theory of tri-dosa of Indian traditional medicine, phlegm is an important element. Our studies of classical Chinese translations of Buddhist literature showed that the concept of *tan* 痰 in Buddhist medicine was introduced into China through Buddhism.

(57)